

宇鉄遺跡の石銚装着

— 津軽海峡南岸の恵山文化期の例 —

福田 友之

1. はじめに

昭和62(1987)年に青森県立郷土館が実施した宇鉄遺跡^(注1)の第4次調査の際、石銚(石製銚先)が6点出土した。このなかに、銚頭に装着された痕跡を残すアスファルト状物質が付着したものがあつた。類例は、北海道島南部の恵山文化期の遺物に見られ、実際に、石銚が鹿角製銚頭に装着されたままの状態出土した例もあることから、その具体的な装着法は既に知られている。しかし、津軽海峡を越えた本州島北端にある宇鉄例については、形態・大きさ等の類似から、装着法はほぼ同様であろうと想定はなされるものの、この時代の銚頭が出土していない本県域では、具体的な検討はとくになされてこなかった状況がある。そこで小稿では、調査に関わった者の一人として、その具体的な装着法について検討してみたい。

2. 宇鉄遺跡と石銚

(1) 宇鉄遺跡(図1・写真1)

宇鉄遺跡は、津軽半島先端の竜飛岬から6kmほど東南の海岸段丘にある。東側は三厩湾に面した急崖、西側は元宇鉄川という小河川によって画されており、標高は約20~30m。遺跡からは海峡の対岸に松前半島を間近に望むことができる。地籍は青森県東津軽郡三厩村宇鉄字下平他。

この遺跡には縄文晩期・後期、弥生期の各遺物出土地点があり、昭和50~52・62年に県立郷土館が行なった弥生地点の調査において、中期前半の宇鉄Ⅱ式期を主とする土壙墓・カメ棺墓群が発見された^(注1・2)。出土した土器・石器類は、北海道島南部を中心として盛行した続縄文前半期の恵山文化と



図1 宇鉄遺跡の位置(本図は国土地理院発行の5万分の1地形図を複製したものである。)

の関わりを強く窺わせるものであったが、一方では、土墳墓から糸魚川産と見られる硬玉製丸玉1点と佐渡猿八産の碧玉製管玉350余点^(注3)が出土するなど、新潟県域南部・佐渡・富山県域北部との関わりを窺わせるものもあり、おおいに注目された。

(2) 石銛の分類(図2・3・5)

出土した石銛は、昭和62年出土の6点と昭和50～52年出土の4点の計10点である^(注1・2)。

昭和62年出土の6点は第2号土墳墓から出土した。土墳墓は楕円形で、確認面における長さは110cm、幅は82cm、深さは34cmであった。このなかに2個の大型土器(カメ棺)が口縁を斜め下にして納められており、石銛は1以外はすべて土器の外から出土した(図2・3)。耕作によりカメ棺下半部が破損されていたため、石銛が埋納された状態をとどめているかどうか不明であるが、カメ棺外に納められていたものと見られる。また、この土墳墓からは、ほかに珪質頁岩製のナイフ・玉髓製の靴形石器各1点(図5)と珪質頁岩製の同一母岩から剥ぎ取ったと見られる剥片8点、凝灰岩製の小円礫1点と碧玉製管玉2点も出土したが、同様にカメ棺外にあった可能性が非常にたかい。

さて、これら石銛6点にはアスファルト状物質が付着したものや付着していないもののほかに、糸巻状の痕跡が明瞭に残されたものがあり、その痕跡によって、つぎの5つに分類される(図3)。

A(1)・・・a・b両面茎部に茶褐色のアスファルト状物質が認められるもので、b面に主要剥離面が残されている。唯一、カメ棺(第2号土器)内から出土した(図2のS-9)。

B(2)・・・b面茎部のみにアスファルト状物質が認められるものであ

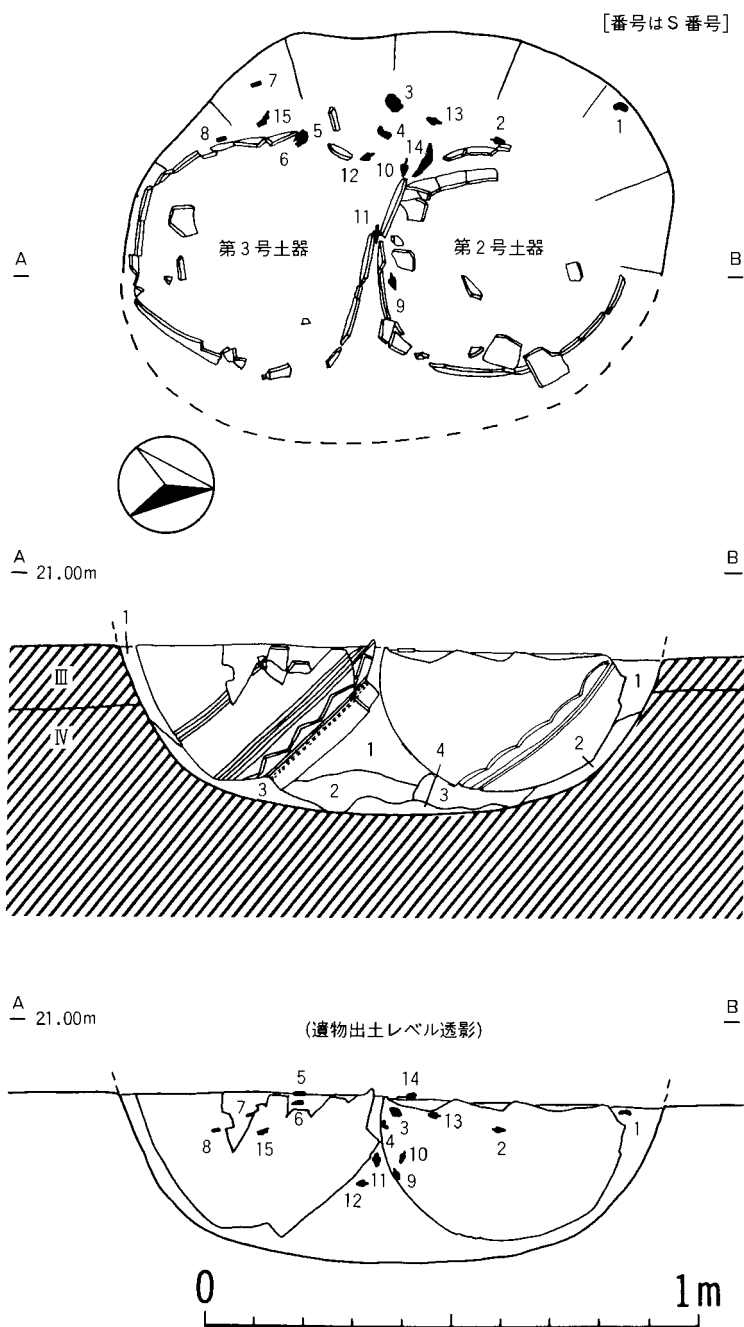


図2 宇鉄遺跡の第2号土墳墓と石器の出土位置

る(図2のS-2)。

C(3)・・・a面中央部に黒いアスファルト状物質が厚く付着しているものである。ただし、その下端は、銚頭先端部の形状を示すように弧状にカーブしている。b面には主要剥離面が残され、側面は湾曲している。また、b面にはアスファルト状物質の付着痕はまったく認められない(図2のS-10)。

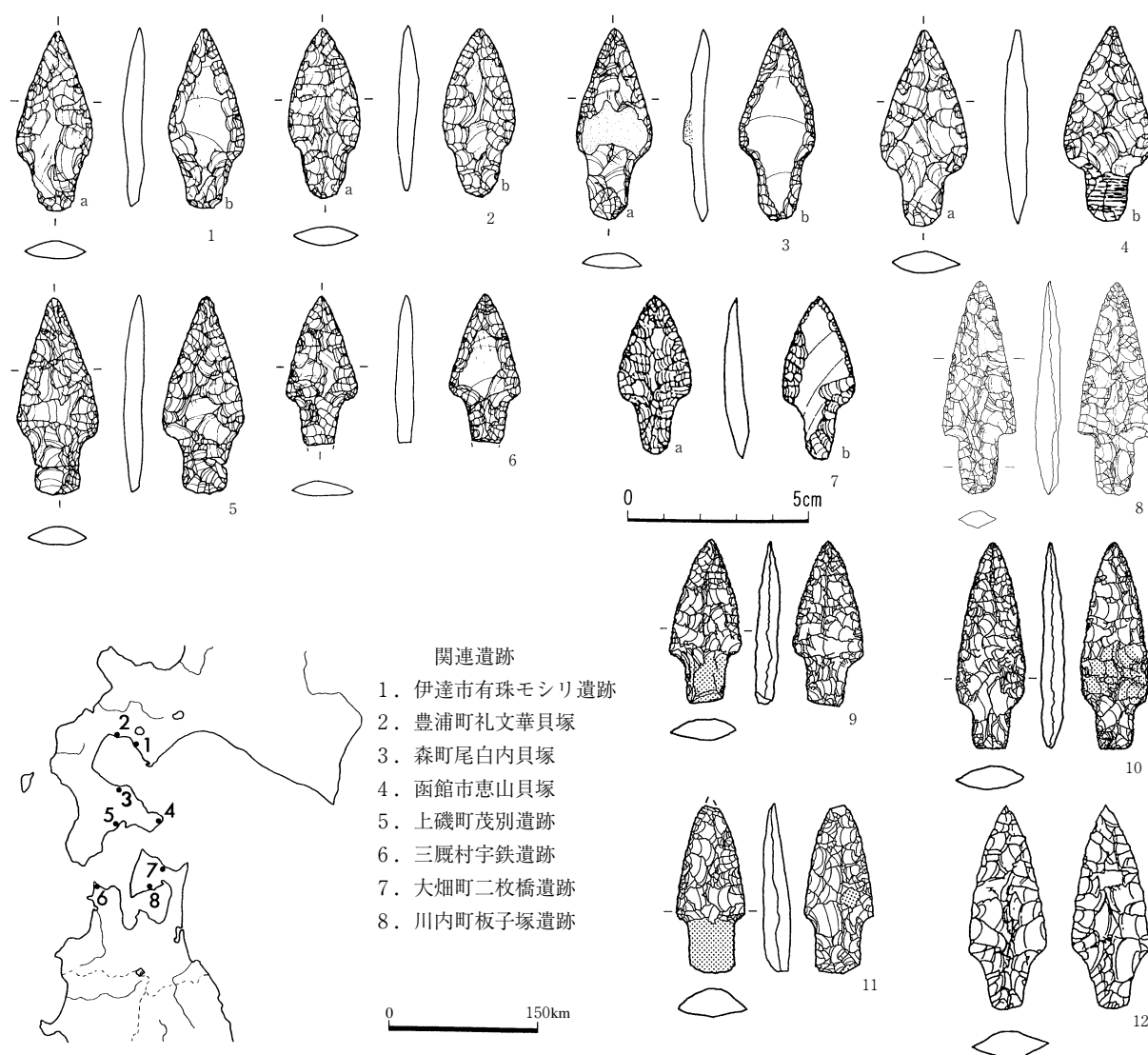


図3 宇鉄遺跡の石銚と関連資料及び関連遺跡

D(4)・・・b面基部に糸を密に巻き、茶褐色のアスファルト状物質で固めた際の痕跡が認められるものである。また、a面にはアスファルト状物質の付着痕はまったく認められない(図2のS-12)。

E(5・6)・・・アスファルト状物質の付着が両面に認められないもの(図2のS-13・11)で、昭和50～52年出土の4点も同様であることから、計6点に認められないことになる。これらの石材は、5が近隣の出来島産の黒曜石、他の9点は津軽半島産と見られる頁岩である。

3. 北海道島南部の石銛の装着例(図3・4)

まず、アスファルト状物質が付着した石銛は、津軽海峡に面した上磯町茂別遺跡^(注4)や噴火湾に面した森町尾白内貝塚^(注5)等に類例があり、茂別例(9)は、茎部片面に付着が認められる点で宇鉄Bと同様であり、さらに茎部片面上方に付着した例(10)・尾白内(12)の厚く付着した例は、宇鉄Cと同様である。また、茂別(11)の茎部片面に糸巻痕、片面中央部にアスファルト状物質の付着が認められる例は、宇鉄Dと類似している。

つぎに、石銛の装着法を具体的に示す例は、函館市恵山貝塚(市立函館博物館の能登川コレクション^(注6・7)、豊浦町礼文華貝塚の土墳墓^(注8~10)、伊達市有珠10遺跡の土墳墓(遺跡名はこの後、有珠モシリ遺跡に変更された)^(注11・12)から出土している。恵山には鹿角製銛頭が2点あり^(注7)、1点は先端に玉髓製の石銛が装着されたままの状態出土している(13)。下端中央に銛柄(中柄)用の茎孔をもつもので、木村英明氏^(注6)の言う茎孔式(ソケット式)に当たる。銛頭全面に浅く彫り込まれた幾何学文様と「く」の字形にカーブした正面観を持ち、銛索(縄)が付けられる孔(索孔)がある。また、片側縁に大きな鋭い鑢(カエリ)を持ち、銛頭先端には、石銛を装着するために片面を削ぎ落とし、茎部を納めるための浅い溝を作り、反対側に糸を巻きつけるための浅い糸かけ部を作りだしている。また、他の1点(14)は先端部破片で、アスファルト状物質が付着している。これらはいわゆる「燕尾形離頭銛頭」で、大島直行氏が茎孔式単尾銛頭Eタイプ(恵山タイプ)と呼称したもの^(注11)である。また、礼文華の土墳墓には頁岩製石銛が装着された状態で出土した銛頭が4点あり(15・16)^(注10)。銛頭には彫刻があるものとないものがある。中柄を挿入した茎孔はすべて尾部中央にある。索孔は3点が体部下半の正面、1点が体部下半の側面にある。体部の鑢と同様に尾部も両側に突出しており、大島氏が茎孔式双尾銛頭Eタイプ(恵山タイプ)と呼称したもの^(注11)のものである。また、有珠モシリでは、頁岩製石銛が装着された状態で出土した鹿角製銛頭8点のうち、5点が写真と図で紹介された^(注11・12)。茎孔式単尾銛頭Eタイプ3点(装着例2点は写真8・26)^(注12)(17・18は同タイプの非装着例)^(注11)、茎孔式双尾銛頭Eタイプ5点(うち図示装着例は3点。20・21)^(注12)・(22)^(注11)である。また、このほかにここではじめて出土したもので、銛頭先端に切り込みが入れられ石鑢を差し込むタイプ(19)^(注11)も紹介され、茎孔式単尾銛頭Uタイプ(有珠10タイプ)と呼称されているが、これには石鑢が装着した状態で出土した例は見られない。

4. 宇鉄の石銛の装着復原(図3~5)

これらの北海道島南部例を参考にして宇鉄の石銛の装着復原を行なってみると、まず、茎部両面にアスファルト状物質が付着した宇鉄Aについては、茎孔式単尾銛頭Uタイプ等の挟み込み接着の可能性が高いが、片面接着の可能性もないわけではない。また、片面にアスファルト状物質が付着したものでは、茎部上方にアスファルト状物質が厚く付着した宇鉄Cや尾白内例は、恵山・礼文華例の茎孔式単尾銛頭Eタイプないしは有珠モシリ例の茎孔式双尾銛頭Eタイプに片面接着法で装着されたと見られる。宇鉄Cはa面の接着であろう。また、片面に糸巻痕とアスファルト状物質痕がある宇鉄D・茂別例は、装着の際に糸を巻きアスファルト状物質で固めたと見られるもので、宇鉄Cと同様に片面接着法で装着されたものであろう。ただ、宇鉄Dは茎部が短めであることから、茎孔式単尾銛頭Eタイプに装着されたもので、a面を銛頭に接着させたものであろう。また、片面にアスファルト状物質

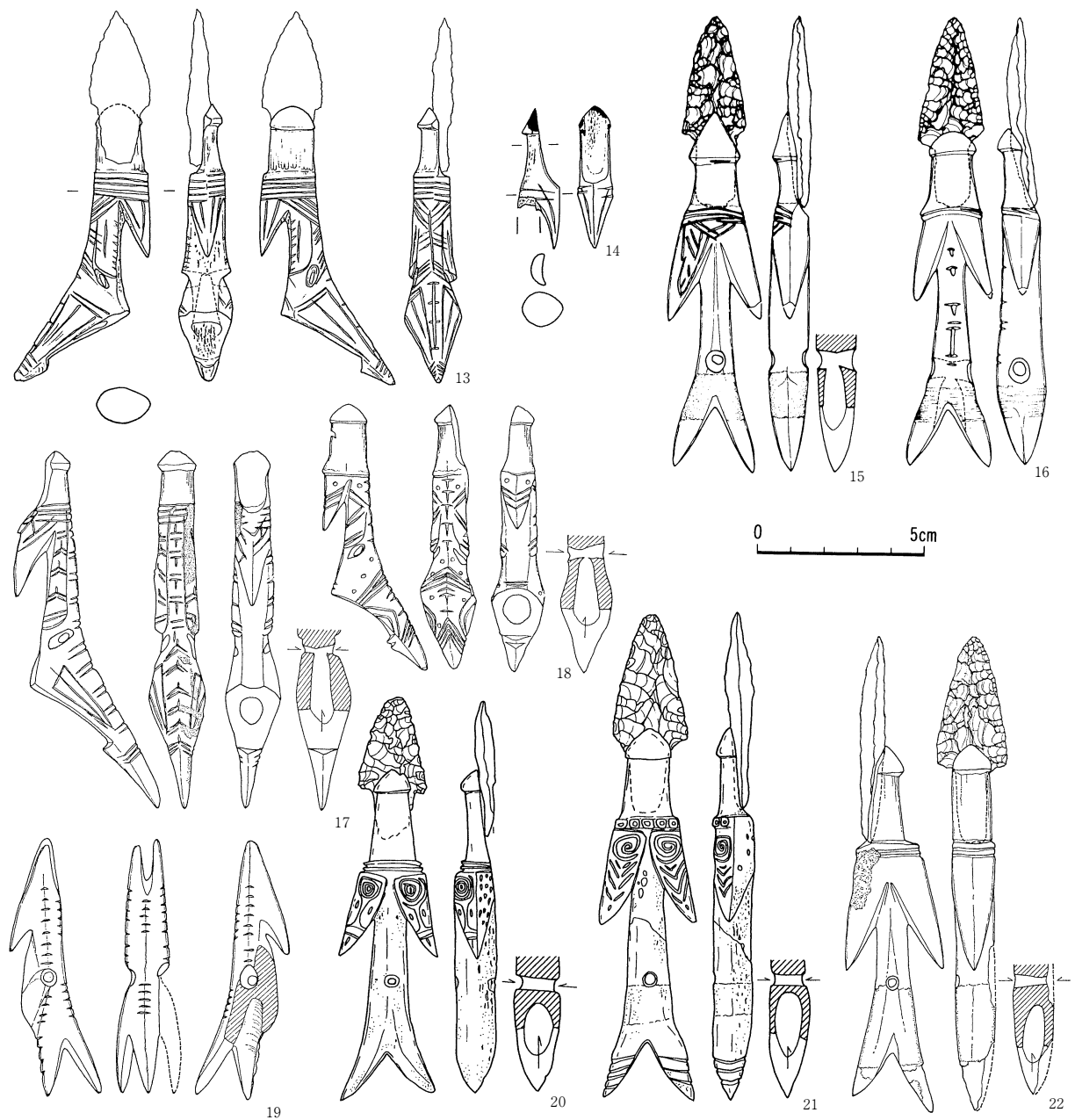


図4 北海道島南部の銚頭と石銚装着例

が付着した字鉄Bについても、茎部が短めであることから、茎孔式単尾銚頭Eタイプの片面接着法による装着例であろう。なお、これらが土壙墓に埋納される際に、装着したままで行なわれたかどうか不明である。

また、字鉄例の大半を占めるアスファルト状物質の付着痕が認められない石銚(字鉄E)は、恵山・有珠モシリ等の北海道島南部の恵山文化でも一般的なものであり、共通している。しかし、これが銚頭に片面接着法で装着されたものか、先端に石鏃を挟み込む茎孔式単尾銚頭(Uタイプ)に装着されたものか、あるいは他の材質の柄の装着等に用いられたものか明確ではないが、可能性としては有珠モシリ例等により、銚頭に片面接着法で装着されたものが多いと見られる。おそらく、字鉄D・茂別例のように糸を密に巻いて(アスファルト固着を行なわないで)銚頭に固定したのであろう。恵山文化期

の北海道島南部におけるアスファルト使用頻度の少なさは、おそらくこの地域における石鏃等の着柄が、縄文期以来、アスファルトを余り使用しないで行なってきた技術の延長上にあるのであろう。

以上のように、アスファルト状物質の有無・付着状況によって、宇鉄の石銛例には銛頭への挟み込み接着と片面接着、あるいはその他まだ不明の装着法が想定されるが、多くは銛頭への片面接着で装着されたと考えられる。また、石銛形態との関連で言えば、すべてとは言えないが、宇鉄例は茎部が短めで、恵山の茎孔式単尾銛頭Eタイプ例(13)と大きさ・形態・鏃(カエリ)の部分が類似しており、しかもこの恵山資料には、茎孔式双尾銛頭Eタイプに石銛装着例がないことから、茎孔式単尾銛頭Eタイプに装着された可能性がたかい。

さて、本州島北端における石銛の類例は非常に少なく、本県域の大畑町二枚橋遺跡(図3-7)^(注13)、川内町板子塚遺跡(図3-8)^(注14)等から頁岩製のもの数例が知られているにすぎない。前者は弥生前期(二枚橋式期)のもの、後者は弥生中期～後半とされる第4号土壙墓から出土したものであるが、アスファルト状物質の付着痕はともに見られない(宇鉄E)。二枚橋例はb面に主要剥離面が残されており、形態から言えば宇鉄・恵山例に類似していることから、茎孔式単尾銛頭Eタイプに片面接着で装着された可能性がたかい。また、板子塚例は大型で長方形気味の長めの茎部をもつもので、礼文華・有珠モシリの茎孔式双尾銛頭Eタイプの装着例に、大きさ・形態が類似している。有珠モシリでは茎孔式単尾銛頭Eタイプも出土しているが、礼文華・有珠モシリに個体数が多い茎孔式双尾銛頭Eタイプに片面接着で装着された可能性がよりたかい。

有珠モシリの茎孔式単尾銛頭Uタイプ(19)に見られる、銛先鏃(形態は不明)を先端の切込みに挟んで固定する技法は、縄文後・晩期や続縄文期の銛頭、さらに周辺地域の近世アイヌのキテなどに見られ、これを東北地方の影響を受けたものとする大島氏の見解^(注11)には同感であるが、茎孔式単尾・双尾銛頭Eタイプに見られる片面接着という石銛装着法は、北海道島南部以外の縄文～古代等で明確な例は、今のところ宇鉄例のみで、まさに噴火湾沿岸から津軽海峡域にかけて独自に見られる装着法と考えられる。この技法が用いられた理由は、石銛という大型石鏃の装着による重量増から軽量化を図る方法^(注15)であり、さらには銛頭の破損軽減や石銛交換の容易性でもあったと見られる。

5. 宇鉄の石銛の捕獲対象

つぎに、この石銛を装着した銛頭の対象が何であったのかという問題がある。一般的には海獣とされる場合が多いが、札幌大学の木村英明氏は、銛頭の発達は大魚類か海獣類に支えられたと考えられるが、すべてをそうとは言えないとし、銛頭の大小も考慮する必要性を述べた^(注6)。また、北海道函館市の戸井貝塚(縄文後期初頭)の自然遺物を調査した国立歴史民俗博物館の西本豊弘氏は、小面積から出土した多数のオットセイ個体に関連して、縄文期の角製銛先を装着した銛は北海道島においては、おもにアシカ科(トド・アシカ・オットセイ)の捕獲に用いられた^(注16)と考えている。

さて、宇鉄例についてこの問題を考えるには、この時期の本県海峡域の銛頭と自然遺物の関係を考える必要があるが、弥生期の貝塚は下北半島に2ヶ所知られているのみで、しかも角製銛頭が未発見であるため、相関関係をとらえることはできない。そこで、本県域の縄文・弥生の貝塚から出土する大型獣類・魚類を想定してみると、アシカ科類・鯨類・大型魚類等があげられる。しかし、このなかの鯨類については、海峡に多い寄り鯨の利用と考えられる^(注17)ことから除外し、可能性として残る候

補は、アシカ科類か大型魚類となる。しかし、大型魚類については、すべてを否定することはできないものの、水中の動きの速さなどを考えると、回転離頭銛による捕獲は困難であり、効率も悪い。結論的には、アシカ科類がもっとも可能性がたかいと見られる。本県域におけるアシカ科類は、縄文～近

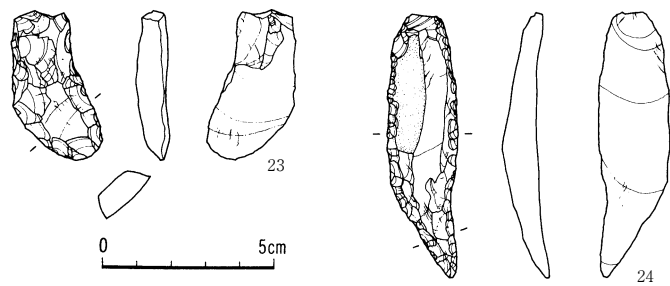


図5 宇鉄遺跡の靴形石器と石製ナイフ

世の22遺跡から出土している^(注17・18)が、西本氏が角製銛頭によるオットセイ猟を想定した戸井のようなオットセイ大量出土例は、本県域では見られないため、その他のアシカ科(トド・アシカ)猟がより可能性がたかい。オットセイよりも接岸性がたかく、比較的捕獲しやすいためである。とくに、毎年冬季から春季にかけて北海道島南部沿岸まで南下してくるトドは、この海峡域に残された椴(トド)法華、トド岬(松前大島)、鮭(トド)島(尻屋崎沖)、海馬(トド)島(深浦町風合瀬沖)の地名からも推定されるように、恵山文化期の海峡域住民にとっては格好の獲物であったはずである。この時代、宇鉄一帯でも、石銛装着の離頭銛によるアシカ科類猟が行なわれていたと見られる。そしてその解体・調理には、対岸と同様に、土墳墓に石銛とともに埋納されていた玉髓製靴形石器(図5-23。図2のS-1)や尖端の曲がった珪質頁岩製ナイフ(図5-24。図2のS-14)^(注1)等が用いられたのであろう。

6. おわりに

石銛が銛頭などの先端に装着される漁猟用の銛先であり、北海道島南部の恵山文化期に一般的な石器であることは、宇鉄遺跡の調査以前から承知していたが、本州島で出土状況を含めて見たのはこの遺跡調査が最初であった。しかし、宇鉄では連日、海峡の向こうに北海道島を眺めて調査していたため、この出土自体についてはとくに違和感を持たなかった。また、アスファルト状物質の付着という点についても、弥生期ということで多少の珍しさはあったものの、縄文晩期の石鏃等への付着例が多い津軽では、当然至極という思いで、報告書作成時^(注1)には特段の注意を払うことはなかった。しかしその後、津軽海峡の文化交流を具体的に示すアスファルトへの関心の高まり^(注19・20)から、報告書作成時に整理した宇鉄例について、あらためて当時の資料記録・メモ等を見直し、アスファルト状物質の付着痕によって、銛頭への装着復原を試みた次第である。その結果、北海道島南部例のなかでもとくに、距離的にも近い対岸の上磯町茂別例等との類似性が確認され、あらためて海峡をめぐる津軽・渡島両半島の文化的関連を強く印象づけさせられることとなった。

弥生・続縄文期においても津軽海峡をめぐる人々の交流は引き続き行われている^(注21)が、この主体者は、海峡を漁猟などで主な生業の場としていた人々であり、民俗学・歴史学で言う「海民」^(注22)的な人々たちではなかったかと以前から想定していたが、石銛が海峡の対岸同士で、形態・柄の装着法はもちろん、墓の副葬品としても共通していたことが再確認されたことは、その想定が的はずれではないことを確信させてくれた。

小稿を終えるにあたり、恵山貝塚資料の実見でお世話になった函館市教育委員会の長谷部一弘氏、有珠モシリ資料についてご教示いただいた伊達市教育委員会の大島直行氏に対して、厚く感謝申し上げ

げる次第である。

『注』

- (1) 青森県立郷土館 1989 『三厩村宇鉄遺跡発掘調査報告書(Ⅱ)―弥生甕棺墓の第4次調査―』青森県立郷土館調査報告第25集考古―8。なお、本書13Pの石鋸は石銛の誤りである。
- (2) 青森県立郷土館 1979 『宇鉄Ⅱ遺跡発掘調査報告書』青森県立郷土館調査報告第6集 考古―3
- (3) 藁科哲男・福田友之 1997 「青森県宇鉄・砂沢・垂柳遺跡出土の碧玉製管玉・玉材の産地分析」『青森県立郷土館調査研究年報』第21号
- (4) (財)北海道埋蔵文化財センター 1998 『上磯町 茂別遺跡』(財)北海道埋蔵文化財センター調査報告書第121集
- (5) 森町教育委員会 1993 『尾白内2―続縄文遺跡の調査報告』
- (6) 木村英明 1982 「骨角器」『縄文文化の研究』第6巻 雄山閣出版
- (7) 佐藤智雄・五十嵐貴久 1996 「能登川コレクションの骨角器について」『市立函館博物館研究紀要』第6号
- (8) 峰山 巖・山口 敏 1969 「第1編 先史時代」『豊浦町史』
- (9) 渡辺 誠 1973 『縄文時代の漁業』考古学選書7 雄山閣出版
- (10) 大島直行 1988 「北海道続縄文の漁労具―恵山式銛頭について―」『月刊考古学ジャーナル』No295
- (11) 大島直行 1988 「続縄文時代恵山式銛頭の系譜」『季刊考古学』第25号
- (12) 伊達市教育委員会 2004 『図録 有珠モシリ遺跡』
- (13) 須藤 隆 1970 「青森県大畑町二枚橋遺跡出土の土器・石器について」『考古学雑誌』第56巻第2号
- (14) 青森県埋蔵文化財調査センター 1995 『板子塚遺跡発掘調査報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書第180集
- (15) 伊達市教育委員会文化財課の大島直行氏のご教示による。
- (16) 西本豊弘 1993 「海獣狩猟から見た津軽海峡の文化交流」『古代文化』第45巻第4号
- (17) 福田友之 1998 「本州北辺における鯨類出土遺跡―津軽海峡南岸域における先史鯨類利用―」『青森県史研究』第2号
- (18) 西本豊弘 1999 「貝塚出土の動物遺存体」『東通村史―遺跡発掘調査報告書編―』東通村
- (19) 福田友之 1999 「北の道・南の道―津軽海峡をめぐる交流―」『海を渡った縄文人』小学館
- (20) 福田友之 2000 「本州北辺地域における先史アスファルト利用」『研究紀要』第5号 青森県埋蔵文化財調査センター
- (21) 福田友之 2002 「津軽海峡交流と弥生石偶」『北海道考古学』第38輯
- (22) 網野善彦 1999 「海民」『日本民俗大辞典上』吉川弘文館、このほか大林太良 1992 「日本の海洋文化とは何か」『海と列島文化第10巻 海から見た日本文化』小学館など